



1

八谷和彦《OpenSky》プロジェクト

2010.4.29-8.31

「OpenSky」は個人的に飛行装置を作り、人が乗って実際に空を飛ぶことを目的にしている。スポーツとしても文化としても、個人的に空を飛ぶことが定着していない日本では、「飛行」は特別なことだから、そもそも「個人的に」という言葉を「飛行装置を作る」に結びつけるのはむずかしい。そのうえ、八谷にとって、その飛行装置とは、宮崎駿・作『風の谷のナウシカ』に登場する「メーヴェ」の機体コンセプトを取り入れたものであることが絶対条件であった。メーヴェは独語で「カモメ」を意味し、ナウシカのメーヴェも、カモメが飛行中に広げた翼と同じフォルムを持つ、小型の一翼機である。エンジンを搭載し飛行するが、風をつかまえて滑空することもできる。現在の技術から考えて「工学的には合理的」なフォルム¹⁾とされながらも、折

りたみ可能な翼や、収納式のペダルでエンジンを着火し、垂直離陸や高速飛行をすることや、操縦把を握って立ち乗りしたり、頭上に持ち上げて走ることができるほどのコンパクトな飛行装置は、あくまでも架空の話の中のことである。八谷の過去の作品「エアボード」シリーズ²⁾や《サイコ・コミュニケーター・システム(フラナガン研究機関)》³⁾に見られるように、フィクションを現実 realistically 実体化する可能性を追求するのは、八谷和彦というアーティストの特性のひとつといていい。反重力の飛行装置の姿をメーヴェに借りたのも、その延長上にある。それと同時に、八谷がメーヴェに関心を寄せたのはプロジェクトが開始された時代にある。

『風の谷のナウシカ』は土鬼(ドルク)とトルメキアという二つの国の対立から起きる闘い

に、ナウシカのいる風の谷が巻き込まれていくというストーリーだ。「OpenSky」は2003年に開始されたプロジェクトだが、時はイラク戦争に日本が参戦した年でもあった。武装解除や特定の民族弾圧など、参戦しなければならない事由に日本が直接関与していたとは考えにくい。にもかかわらず、アメリカを支持し派兵を決めて戦争に参加していった状況を、八谷は『風の谷のナウシカ』に写してみたとったのだ。対立や抵抗による破壊ではなく、理解や尊重による共生の道を探ること。「OpenSky」は、少なくとも闘うことの必然を議論することなしに進んだ国家国民の状況に抵抗し、メーヴェで自由に空を飛ぶナウシカに希望の託したプロジェクトでもあるのだ。

「OpenSky」プロジェクトには、八谷のもうひ



2



3



4

1. 《OpenSky》プロジェクト：展示風景

2. 八谷和彦《M-02》2004-2006年
スプルース、アラスカ棒、GFRP、CFRP、ジェラルミン、他
H131.5×W963.6×D313 cm
金沢21世紀美術館蔵

3.4. 八谷和彦《OpenSkyテストフライト》2008年
金沢21世紀美術館蔵

2. Photo: KIOKU Keizo

3.4. Photo: YONEKURA Hirotaka

とつこの想いが込められている。それは日本に民間用航空機の市場がないことである。八谷は、しかしこの現状に対して市場がないと飛行機の開発できないというのであれば、マスプロダクトであることを問われないアートの実現だったら可能かもしれないと考えた。これが「個人的に飛行装置を作る」につながっている。技術的実現性を達成しても、有用かつ経済的実現性を問われる経済市場で飛行機開発を個人で実現することは事実上不可能である。しかし、現代社会は行き詰まっていると仮定するならば、失敗されても許される文化を自ずと持つアートの世界は、適応力とイノベーションを包容する夢のようなフィールドである。そして初めの1機が成功すれば、次は未来の人の行動を変えてしまうかもしれない。つまり近い将

来、八谷に倣えば自由に空を飛べるとなれば、技術革新が進められ、社会システムも変わる可能性があるのだ。21世紀を形づくる山ほどの課題を、今後我々はどのように解決していくのだろうか。「OpenSky」プロジェクトは、実機の作り方を提案するものではなく、未来に対する人間の態度と姿勢を問うものだ。個人の創造性をいかに発揮させ、あらゆるジャンルを横断しながらコラボレーションによって実現していくこと。「OpenSky」プロジェクトは、めまぐるしく変化する時代の要請に、最適解を以て応えるイノベーションとなる可能性を持っている。

(黒澤浩美)

*1. 「四戸哲：八谷和彦対談」

八谷和彦 公式ホームページより
<http://www.potworks.co.jp>

*2. 映画「バック・トゥー・ザ・フューチャー」に出てくるホバーボードを、ジェットエンジンを搭載して制作した。

*3. アニメーション作品「ガンダム」に登場するニュータイプという概念に着目し、「サイコ・コミュニケーター・システム（フラナガン研究機関）」の名で行われた「視線のみで相手を無意識のうちに誘導する」実験を行う、体験型作品。